

細く入り組んだ夜の路地を、着物姿の少年が逃げていく。しきりに振り返る彼が気にしているのは追手の存在だ。先程から追手は、鋭い殺気を隠しながら着実に距離を詰めてきている。

このままでは逃げきれない。追いつかれてしまう。その後自分がどうなるか想像もしたくなかった。少年は路地の角を曲がる。その先は行き止まりだ。

だが少年は、あえてここに来た理由があった。

すぐ背後に殺気が迫る。その気配をぎりぎりまで引きつけて少年は高く跳躍した。長屋の屋根へ飛び乗ろうとする——その瞬間、背後で青年の声が聞こえた。

「縛」

「っ、」

胸に走る衝撃と共に、少年の体は見えない力で引きずり降ろされる。彼の赤い目が驚愕に見開き、けれどその驚きは、何に繋がらぬまま彼自身と共に消失した。

逃げ回った少年姿の化生を、一刀のもとに斬り捨てた青年は、化生の消失を確認すると息をつく。

その彼をよたよたと追って、着物姿の少女が現れた。

「シ、シシュ……だじょうぶ、だった……？」

「ああ。巫が縫い付けてくれたからな」

それを聞いて少女は微笑む。銀の髪を結び上げ、白い着物を着た彼女は、夢幻のような美貌の持ち主だ。今はまだ少女らしい清純さが色濃いが、あと一、二年もすれば、匂い立つような娼妓になるだろう。それもそのはずで、彼女は神話に由来を持つ享楽街アイリデーにおいて、『聖娼』の由来を持つ妓館『月白』の主だ。

同時に、この街に発生する化生を、「化生斬り」に繋ぐ巫でもあるサアリは、こうしてシシュに帯同して化生を追ったりもする。するのだが、剣士である彼とサアリは走る速度も体力も違う。最初に縫いつけた後は、どんどんシシュに引き離されていくのが常だ。今も疲れ果てて座りこみそうな少女に、シシュは手を差し出す。

「もしだったら、次は縫いつけた後、茶屋で待っていてくれて構わないが」

「いいの！ 私がついていきたいんだから」

サアリは彼の手を取る。そうして姿勢を正すと、彼女はいつもの凜とした妓館の主だ。少女と大人の狭間にある青い目が、じっとシシュを見つめる。

そのまなざしを見返す時彼は、自分でも理由の分からぬ落ち着かなさに駆られるのだ。踏み出した足がふわりと柔らかい底なしのどこかに沈んでいくような、そんな錯覚を覚える。

今も無意識のうちに彼女の双眸に見惚れていたシシュは、我に返ると苦い顔で視線を逸らした。少女の手を引いて歩き出すと、彼女はべったりと青年に身を寄せる。

「シシュは報告書を書きに戻るんでしょ？ 私もついていっていい？」

「巫には巫の仕事があるんじゃないか？」

「まだ昼だから時間あるもの」

「あと巫と歩いているとやたら注目されるんだが」

「それは我慢して」

サアリは白々と言いきる。それと言うのも、巫である彼女の客は生涯ただ一人と決まっています、街の人間皆がそのことを知っている。

そんな彼女と一緒にいれば、必然「相手はサアリの客候補か」と注目を浴びる。だがシシュにとってそれはただ申し訳ないだけだ。

自分は単なる一兵士であり、彼女はまだ誰も選んでいない。ただサアリは街の外から来た自分を気にかけてくれるに過ぎないのだ。せめて彼女に不要な誤解や好奇心の目が向けられぬように気をつけなければ。

シシュはそこまでを考えると、サアリの手を放す。

「分かった。なら三人分ほど間を開けて行こう。俺は巫の後ろから距離を取ってついていく」

「なんで!？」

「巫の評判に障らないように、念のため」

「それ、私がシシュにまったく相手にされてないって皆に哀れまれる、の間違いじゃなくて!? むしろ月白の娼妓のくせに未熟者って評判になるんですけど!?」

「巫はちゃんと仕事をしているだろう……」

サアリの何を刺激してしまったのかは不明だが、少女は頬を膨らませると、両手でシシュの左腕にしがみついていた。絶対離さないという意志と力がこもっている。

「私が、あなたと一緒にいたいからついてくの。他の女には絶対負けないからね!」

「何の話なんだ……」

シシュは仕方なく、少女をぶらさげたまま話め所へと戻る。そんな二人を、街の人間はいつものものとして微笑ましく見送っていた。